

第四章 論理的文法機構

一

此處に論理的文法機構といふのは言語の理知的習慣體制、分析綜合の體制である。それはイエス・ペルセンの言ふやうに a broader-minded logic の如きものであり、更に沒論理的思惟、或は超論理的思念の反映の如きものと考へなければならぬかも知れないが、兎も角、敬語法の如き言語の倫理的社交的習慣體制や、種々の表情法の如き言語の審美的表現的習慣體制などといふものに對立し、然もその骨子となり基礎を成すところのものである。さうして之が心髓を知ることが、聽て日本人の思惟活動の核實を捉へる所以であり、日本知性の運命的特質を把握する所以であると思ふ。日本語の現在ある如き構造は何時如何なる處で成立したかは知る由もないが、文獻の辿り得る範圍内に於ては、外郭的に多少の變異を見せつゝも、常に同心圓的なものを描いて來てゐる。日本人は幾千年來かゝる言語の構造性を生命核として其の思惟活動を續けて來たものであり、更に又かゝる構造型は日本知性の多様な展開活動によつて鍊り鍛へられて來たものである。私が今ここで述べよう

とする論理的文法機構といふことは以上のやうな意味合のものである。

日本語は普通困難な言語の一つとされてゐる。併し私は其の捉へ方如何によつては、必ずしも困難であるとは思はない。困難であるといふのは、日本語そのものの罪ではなく、却つて其の學習の手法に缺陷があるのではないかと思ふ。殊に日本語に關する知的組織といふものが未だ眞にその核心を捉へて説明してゐない爲ではないかと思ふ。日本語に卽しない學的體系に媒介せられてゐるからではないかと思ふ。眞に日本語に妥當な理智的手段を介し秩序正しく學習して行けば、さまで困難な言語ではないと思ふのである。日本語は誰しも氣付く如く極めて分析的な言語である。語彙的ではなく文法的である。任意性 (arbitrariness) ではなく配意性 (motivation) である。殊更 Basic などの心配をしなくても本來的に Basic になつてゐるのである。此の點日本語は自然的な學習よりも寧ろ合理的學習に對して恰好の言語であると言へる。莊嚴を誇る支那語や歐米諸國の言語とは比較にならぬ位少數簡素な語彙を言語活動の途上に於て一定の方式に従つて只組合せて行けばよいのである。肝要は構造的に在るのである。然も其の構造の原理は極めて直截簡明である。そこに盡し難い深みがあるのであるが取付き易い言語である。逸早く其の根本原理さへ押へてしまへば、後は絲を繰る如く序るのである。日本語の學習はかやうなものを根幹として常に展開されなければならない。日本語の知的組織はかやうなものによつて貫かれてゐなければならない。

かゝる原理性は、古代語より近代語、近代語より現代語に進展するに従つて、次第に挾雜物的形骸が芟除せられ、益々顯に純一になつて來る傾向がある。勿論そこには逆行的に之を混亂せしめ遮り隠さうとする種々の因子も働いてゐる。併し眞の根本原理とも稱すべきものは微動だもしてゐないのである。同心的に波動してゐるに過ぎない。それは日本語の根元的構造化をより分明に浮出さんが爲の悠久なる歴史的運動である。随つて日本語のかゝる歴史的展開の繪姿の幾枚かを重合せて見ることに、其の構造原理或は理想態可能態といふものを直下に讀取ることが出来るのである。而して又一面かやうなものを鍵鑰として未來の状態を覗ふことすら不可能ではない。逆視的に溯行する比較法により湮滅せる共同祖語を再構する如く、順視的に流を下る歴史法は、將に實現せらるべきものの輪郭を未然に構想することも出来るのではないかと思ふ。而して眞の國語問題の解決といふものは常にかやうな方向に於て考究されなければならない。私は以上の如き意味に於て日本語の論理的文法の機構を解剖して見ようと思ふ。

日本語の論理的文法機構を最も一般的に表明すれば、より觀念的な要素は先行的であり、より文法的な要素は後行的であるといふことになる。或は之を裏返しに、先行するものは常により觀念的な要素であり、後行するものは常により文法的な要素であると言つても差支ない。例へば

遠く飛ぶ。

の如き結合を見るに、先行の「遠く」は「飛ぶ」といふ動作觀念の内容を情態的に限定してゐるもので、「飛ぶ」に比し觀念的方向に傾いた要素と言はなければならぬ。之に反して後行の「飛ぶ」は此の陳述の文法的責任を一切引受けてゐるのであつて、「遠く」に比し文法的色彩が著しく濃厚であると言はなければならぬ。又之を

遙かに遠く飛ぶ。

とすれば、「遙かに」と「遠く」との間に矢張同様な關係が成立してゐる。即ち先行の「遙かに」は「遠く」といふ情態觀念の内容を更に限定してゐるものであり、後行の「遠く」は此の形容の文法的責任の一切を引受けてゐるのである。随つて「遙かに」は「遠く」よりも觀念的であり、「遠く」は「遙かに」よりも文法的であると言はなければならぬ。此の際「遙かに」は「飛ぶ」に對し直接的に關係してゐない。只「遠く」を介して間接的に關係してゐるに過ぎないのである、更に

いと遙かに遠く飛ぶ。

とした場合「いと」と「遙かに」との間に又同様な關係が成立つ。即ち先行の「いと」は「遙かに」といふ情態觀念の内容を程度的に限定してゐるものであり、後行の「遙かに」は此の形容に於ける文法的責任の一切を引受けてゐるのである。故に「いと」は「遙かに」よりも觀念的方向に傾いた要素であり、「遙かに」は「いと」よりも文法的方向に傾いた要素であると言はなければならぬ。此

の場合も「いと」は「遙かに」にのみ直接に關係し、「遠く」には「遙かに」を介し、「飛ぶ」には「遙かに遠く」を介してのみ間接的に關係してゐるのである。今度は反對に

いと遙かに遠く飛ぶ雁。

などとすれば、「飛ぶ」と「雁」との間に新しい直接關係が成立つ。即ち先行の「飛ぶ」は「雁」といふ實體觀念の内容を修飾限定してゐるのであり、「雁」は「飛ぶ」を受けて文法的責任の一切を負つてゐるのである。随つて「飛ぶ」は「雁」よりも觀念的であり、「雁」は「飛ぶ」よりも文法的であると言へる。然るに今先後を反轉して

雁飛ぶ。 雁が飛ぶ。

の如くすると、兩者の關係も反對になつて來る。即ち「雁」は「飛ぶ」動作の主體を指標する爲の要素で、「飛ぶ」に比べて觀念的であり、「飛ぶ」は此の陳述の文法的責任を負擔してゐる要素であるから「雁」に比べて文法的である。

雁を見る。 雁に問ふ。雁と遊ぶ。

などの如くすれば兩者の關係が更に明瞭になる。「雁を」「雁に」「雁と」などは總てより觀念的であり、「見る」「問ふ」「遊ぶ」などは總てより文法的である。

雁の友。 雁の涙。

の如きものでは兩者其實體觀念ではあるが、「雁の」の「の」が利いて、それが「友」とか「涙」とかを限定してゐるのであるから觀念的であり、随つて「友」「涙」は文法的であると言はなければならぬ。

雁と雲。 雁や燕。

の如き結合に於てすらかやうな傾があるのである。次に少しく大きな要素單位の結合を取扱つて見よう。例へば

餘念なく本を読む。

に於て「餘念なく」と「本を読む」との二要素に分析することが出来るが、「餘念なく」は「本を読む」有様を限定してゐるのであるから、より觀念的であり、「本を読む」は此の陳述の主要部であるからより文法的と考へなければならぬ。又

餘念なく本を読む彼。

とすれば、「餘念なく本を読む」と「彼」とに差當り分析することが出来、前者は後者に比べて觀念的であり、後者は前者に比べて文法的であると言へる。反對に

彼は餘念なく本を読む。

とすれば關係が逆轉する。此處で注意しなければならぬのは、かやうな結合を「彼は……本を読む」

と「餘念なく」との如く分析してはならぬことである。それは主述の關係に執はれた西洋流の考へ方である。此處では先づ「彼は」と「餘念なく本を読む」とに分析し、然る後「餘念なく」と本を読む」とに分析して考へて行かなければならないのである。随つて

象は體大なり。象は鼻が長い。

の如きものでも、先づ「象は」とそれ以下とに分析して考へなければならない。即ち「象は(鼻が)長い」のやうなやり方ではなく

(象は)(鼻が)(長い)

の如く分析して、次々に其の先行後行の相關々係を考へて行かなければならないのである。かやうな事に就いては又更めて述べることにし、次に

駒がいさめば花が散る。

の如きものは「駒がいさめば」と「花が散る」の二要素に先づ分析し得るが、前者は後者の條件を述べてゐるものであり、後者は前者を受け文法的終結を成してゐるものである。随つて「駒がいさめば」の方はより觀念的であり、「花が散る」の方はより文法的であると言はなければならぬ。

駒はいさめど花散らず。

駒がいさむと花が散る。

の如きものでも同様である。先行要素は複雑な觀念活動の爲に加へられたものであり、後行要素は敘述の文法的責任を取つてゐる。かやうなことが又

駒はいさみて花は散る。

駒もいさむし花も散る。

の如き結合に於てすら稀薄ながら認めることが出来るのである。即ち先行要素は後行要素に只重加せられてゐるが、矢張前者は觀念活動の分化を表現せんが爲に加へられたものであり、後者は基礎的なものとして文法的責任を取つてゐるのである。今度はずつと細部に目を注いで見よう。例へば

雁の涙。 花が散る。 本を讀む。

の如きものは先づ（雁の）＋（涙）、（花が）＋（ちる）、（本を）＋（讀む）の如き結合と見なければならぬが、その先行的なものは更に（雁）＋（の）、（花）＋（が）、（本）＋（を）の如き結合と見ることが出来る。此の場合、先行の「雁」「花」「本」などは實體觀念を示すものであるから、勿論觀念的である。而して後行の「の」「が」「を」などは、それらの實體觀念が種々の關係を以て後方に連續すべき機能を示してゐるものであるから文法的であると言はねばならぬ。

駒は……

花も……

本ばかり……

に於ても同様（駒）＋（は）、（花）＋（も）、（本）＋（ばかり）と見、先行素は觀念的であり後行素は文

法的であると考へなければならぬ。

駒がいさめば…… 駒もいさむし……

の如きものも、先づ（駒が）＋（いさめば）、（駒も）＋（いさむし）の如き結合と見なければならぬが、その後行的のものは更に、（いさめ）＋（ば）、（いさむ）＋（し）の如き結合と見ることが出来る。併して、「勇む」は動作觀念を表すものであるから勿論觀念的であり、「ば」「し」などは前の陳述に連續せしめる機能を示すものであるから文法的である。

（あゝ）悲しきかな。（そこが）妙さ。

の如きものでは、先行的な「悲しき」「妙」は情態觀念を表すもので觀念的であり、後行的な「かな」「さ」は之を受け敘述を終結せしめる働を爲すもので文法的である。更に今少しく構造の内部に立入つて考へて見ると、例へば

静まられよ。行かうか。

の如きものは、先づ（静まられ）＋（よ）、（行かう）＋（か）のやうな結合と見なければならぬが、更に其の先行部は（静ま）＋（られ）、（行か）＋（う）の如き結合と見ることが出来る、先行素は動作觀念を表し觀念的であり、後行素は文法機能を延展する性質のもので文法的である。

思ひつ（かし） 見るべき（に）あらず（や）

來た(ね) 數へられる(くらゐ)

の如きものも皆同様に考へることが出来る。先行的な「思ひ」「見る」「あら」「來」「數へ」等は觀念的であり、後行的な「つ」「べき」「ず」「た」「られる」等は文法的である。更に内部へ進んで

行く。讀む。死ぬ。

の如きものでは、語それ自身に於てもかやうなことが見られる。即ち「行」「讀」「死」の如き語幹は觀念的部分であり、「く」「む」「ぬ」の如き語尾は文法的部分である。

白し。 白い。 美しい。

などもそれ(く)(白)+(し)、(白)+(い)、(美)+(い)であるが、文語の

美し。 悲し。 樂し。

等はゼロ語尾であり、随つて文法的部分は消極的である。かやうな事から

花。 鳥。 山。 水。 これ。 私。

等の語も一般にゼロ文法部的と考へることが出来る。故に

花咲く。 これ買ふ。

などとも言へるのである。右は語幹對語尾の問題であつたが、更に語幹の内部に立入つてかやうなことを考へることが出来る。

春めく。

黄ばむ。

いやがる。

一六〇

などは語幹と語尾とに分析すれば大體(春め)+(く)、(黄ば)+(む)、(いやが)+(る)の如くであらうが、(或は harumeku, kibamu, iyagaru。併し之とて正確とは言へない。)普通はかやうな分析を取らず、(春)+(めく)、(黄)+(ばむ)、(いや)+(がる)の如くするであらう。言ふまでもなく兩者はそれぐの立場に於て正しい。只後者は語幹の境域内にも入りこんで、語根對接辭の問題を取扱つてゐるのである。而して此の場合も先行素である語根は觀念的であり、後行素である接辭は文法的である。かやうな事は

善さ。

眠け。

花やか。

たひらか。

などは勿論

神さま。

兄さん。 汝ら。

私ども。

の如きものに於ても認めなければならぬ。右の如く語根を先行部とする後行的な接辭に、語根を突破し之に先行する接辭がある。前者を接尾辭とすればこれは接頭辭である。随つて接頭辭は

(さ)+(夜)

(か)+(弱い)

(み)+(位)

(そ)+(たたく)

(お)+(願)

(お)+(近い)

のやうに語根に對し常に觀念的である。

構造といふことは理智的機構であるが、言語の理智的機構は常に二股的でなければならぬ。之は言語ばかりでなく、總て理智的媒介によつて構成せられる爲には常に一が二に分析せられ、二が一に綜合せられるといふことでなければならぬ。一體分析とか綜合とかといふことは、何等かの意味に於て矛盾關係の取扱でなければならぬ。矛盾せるものを析出し、矛盾を超えて結合することできればならぬ。神的攝理の代辨とも見るべき知性の眞の意義は此處にあるのである。而して眞の矛盾關係は二つのものの間にのみ成立する。一つのもや雜多のものの中に於て直ちに之を求めようとするならば、それこそ矛盾である。常に知的機構は二股的でなければならぬ。言語の如きものにも理智的媒介作用が働いてゐる以上かやうなことがなければならぬ。勿論言語に於てはそれが個人的思惟や論理理性を超越し、習慣的となり制約化されてゐなければならぬが、之を度外視しては言語の構造性といふことは全く無意義である。思惟活動を動かす核實となることは出来ない。思ふに言語が二股的機構を執るに至つたことが抑、人間言語の誕生であつたのである。動物的な單言語から文法言語への轉換であつたのである。人間がホモ・サピエンスとなると同時に言語が二股的機構を執るに至つた。故に言語の構造性は一般的に二股的であると考へなければならぬのである。言語の構造性はかく二股的に考へなければならぬが、日本語では其の先行要素はより觀念的であり後行

要素はより文法的である。而して其の構造體が如何程多様に複雑化せる場合と雖も常にかゝる二股的累加相として考へなければならぬ。例へば

象は鼻が長い。

の如きものでも、三單位の同時的結合の如く見るから種々の困難な問題が惹起するのであつて、之を二股的累加と見れば何も特別に問題がないのである。

彼は餘念なく本を読む。

の如きものも

(彼は)(+)((餘念)(+)(なく))+(本を)(+)(讀む))

の如く、(本を)(+)(讀む)に(餘念)(+)(なく)が觀念的に關係し其の結合體に對して(彼は)の主體觀念が係つてゐるものと見なければならぬ。又、

遙かに遠く飛ぶ雁。

では

「((遙かに)(+)(遠く))((飛ぶ))+(雁)」

の如く(遙かに)(+)(遠く)が(飛ぶ)を限定し其の二累的結合體が「雁」を限定してゐるものと見なければならぬ。更にそのみでなく「象は」「鼻が」「彼は」「本を」「遙かに」なども

(象) + (は) (鼻) + (が) (彼) + (は)

(本) + (を) (遙か) + (に)

の如きものとして見なければならず、「長い」「なく」「遠く」「讀む」「飛ぶ」なども

(長) + (い) (な) + (く) (遠) + (く)

(讀) + (む) (飛) + (ぶ)

の如きものとして見なければならぬ。かやうなことに就いて今少しく進んで考へて見ると

長いよ 讀むと 飛べば

などでは

〔(長) + (い)〕 + (よ) 〔(讀) + (む)〕 + (と)

〔(飛) + (べ)〕 + (ば)

の如きものとして見なければならず

讀まう 飛んだ

などでは

〔(讀) + (ま)〕 + (う) 〔(飛) + (ん)〕 + (だ)

の如きものとして見なければならぬ。又

象などは 鼻がね 彼には

などでは

〔(象)+(など)〕+(は) 〔(鼻)+(が)〕+(ね)

〔(彼)+(に)〕+(は)

の如きものとして見なければならず

讀まうか 飛んだよ 飛ばなければ

などでは

〔(讀)+(ま)〕+(う)〕+(か)

〔(飛)+(ん)〕+(だ)〕+(よ)

〔(飛)+(ば)〕+(なけれ)〕+(ば)

の如きものとして見なければならぬ。かやうなことを更に微細に進めることも出来る。例へば「なけれ」なども (な)+(けれ) 乃至は *make-re* であり、又語根と接辭の問題も控へてゐる。反對に上位的なものを考へれば尙更止むところを知らない。例へば

象は體が大きく、鼻が長い。

彼は餘念なく本を讀んでゐたが、私は只茫然と窓外の景色に見とれてゐた。

の如く廣げて行くことが出来るのである。之を更に

象は體が大きい。さうして鼻が長い。

彼は餘念なく本を讀んでゐた。然るに私は只茫然と窓外の景色に見とれてゐた。の如く連結を一旦斷切しても、尙接續的な言葉を用ひなどして、後行的なるものが先行的なるものを承けてゐる以上、かやうな關係を考へることが不可能ではない。

日本語では上位的にも下位的にも殆んど際限なく二股的重疊を見ることが出来、然も何れも皆先行的のものはより觀念的であり後行的のものはより文法的である。かやうなことは如何なることを意味するのであらうか。一體、日本語はかゝる言語的構造ばかりではなく、音韻的構造に於ても之と略同様な状態を見ることが出来るのである。例へば音節の構造を見るに、それが開音節などと言はれてゐる如く、音の特異相を形造る子音は先行的であり基本的な母音が後行的である。子音母音の本質はフェニキア字母などに於て容易に推察することが出来るであらう。即ちフェニキア字母では子音はそれ／＼特殊の文字で示されてゐるが、母音は多く無記號的である。それがギリシヤに至つて漸く母音にも子音同様正規の記號を充當するやうになり、後大多數の文明民族に採用されたのである。之は取りも直さず、子音は音の特異相を表徴するものであるから夙くから認定せられたのであつたが、母音は音の基調をなすものであるため、つい見のがされたものと見なければならぬ。言

語の音相は一般に母音の水面上に見る子音のせゝらぎである。而して日本語の音節は普通子音が先行的であり母音が後行的である。かゝる音韻的構造性は矢張日本語の言語的構造性と相呼應するものである。更に各音韻の發音的操作をかやうな見地から生理的物理的に實驗調査して見れば、或は面白い結果が得られるかも知れない。又語音の構成法に就いても何等かの法則性を見出すことが出來ないとも限らない。言表機構に於ても日本人はとかくかやうな道を辿る傾向があるやうに思ふ。

あんたは、お若いのに感心だねえ……斯う見えても、昔はねえ……。だが、今ぢや、おたまも鼠みたいに、地下室にもぐつてゐますさア……浮世とは、さうしたものさ……

こんな例は井戸端會議などから、さらに拾ふことが出來るであらう。さうして、「浮世とはさうしたものだ……」などと言つた極文句の述懷で談話の結末がつけられることが多い。素朴な古代文學ではかやうなことがもつと露骨である。

み吉野の耳我の嶺に

時なくぞ雪は降りける

ひまなくぞ雨は降りける

その雪の時なきがごと

その雨のひまなきがごと

隈もおちず思ひつゝぞこし、

その山道を。

(萬葉・一ノ二五)

の如きものでは、前の五句は單なる題辭的修飾部分であり、吟詠の意思は後の二句に存するのである。とは言へ、前の五句の如きものは、文學構築上極めて重要な意義を有つものと言はなければならぬ。枕詞とか序歌とかいふものはかやうなものが固形化し習慣的となつたものである。祝詞形式の如きも之と略同様に考へて差支がない。即ち先行的には祭祀の本縁來歴等を語る神話的部分があり之を承けて後行的には神徳を稱へ幣帛を奉り祈願の趣旨を述べる祈禱的部分がある。更に物語軍記謠曲等に於てかやうな事が明かに認めることが出来るのである。以上のやうなことはそれを語る國民の性格と深い聯關があるものと考へなければならぬ。始めは結論的なことを差控へ口籠つてゐてあらゆる方面から言辭を整へて置き、最後にこだはる事なくさりと表白して退けるといふ態度或は主我的な陳辯をあからさまにことごとしく述べ立てるやうなことを成る可く避けようとする心遣、或は容易に言舉せぬ奥ゆかしい謙虛、斯様な理智の働き方が眞の和魂の形相であると思ふ。大和魂の本領はまことであると謂はれてゐる。まことは眞事であり眞言である。而して眞の事行、眞の言辭を致すには我を捨て主我を没し、眞に死して生きるといつたまことの心、眞心でなければなら

ぬ。誠心誠意でなければならぬ。誠實でなければならぬ。之に就いて我が國では先づ主我性主觀性を前に出さぬといふことが民族的理性とも言ふべきものとして常に庶幾せられて來た。さうしてそれが文學様式の上にも日常的な言葉の行り方の上にも表れ、引いては言語的機構の根本原理ともいふべきものとして働き、且音韻や發音操作の末々にまで込み込んでゐるものであらうと思ふ。

二

日本語の構造性は、先行的には觀念素、後行的には文法素が結合する二股的累加と見なければならぬが、併しそれらの間に又種々のものを考へて行かなければならぬ。先づ第一に區別しなければならぬのは、觀念的展開のための構造性と文法的發展のための構造性である。例へば

遙かに――遠く――飛ぶ――雁

父は――子に――財産を――譲る

花咲き――鳥啼く

の如きものは前者であり

譲ら――ざら――ましか――ば 財産――を――すら

飛ば――せ――ませ――う――か 孫――に――でも

遙か——も

の如きものは後者である。即ち前者は専ら觀念活動の複雑相を表現せんがために展敍せられたものであり、後者は専ら文法活動の複雑相を表示せんがために延展せられたものである。今前者の如きものを假りに觀念的構造と稱し、後者の如きものを文法的構造と稱して置く。併し觀念的構造内に在つても

(遙かに)△(遠へ)△(飛ぶ)△(離)

の如く、先行的のものはより觀念的であり

(遙かに)△(遠へ)△(飛ぶ)△(離)

の如く、後行的のものはより文法的であることは言ふまでもない。又文法的構造内に在つても同様

(飛ば)△(せ)△(ちせ)△(う)△(か)

の如く、先行的のものはより觀念的であり、

(飛ば)△(せ)△(ちせ)△(う)△(か)

の如く、後行的のものはより文法的である。

觀念的構造とか文法的構造とかといふことは構造型の内面的見地から斯く稱したのであるが、之を外面的見地から言へば、前者は先行的構造、後者は後行的構造などと稱せらるべきものである。

即ち今話線を基準にして考へると、觀念的構造の方向は話線の方向に逆行し、文法的構造の方向は話線の方向に順行するのである。話線といふのは言ふまでもなく、言表が發音操作によつて外的實在界に描かれて行くことであるが、日本語では觀念の展開方向が之に逆行的であり、文法の發展方向は之に順行的である。随つて文法活動は話線に便乗してどこまでも發展して行くといふ傾向があるが、觀念活動はかゝる言語の構造性の爲に動もすれば話線に壓迫され勝である。此處に於て、日本語の音節が母音の後行的なるため語音が母音の水面に立つ子音のせせらぎの如く聞える如く、日本語の構造に於て文法的なるものが後行的である關係上、言表は文法の海に起伏する觀念のさゞ波といった景觀を呈し易いのである。故に日本語は言語としては可成強靱で同化力包容力に富み發展的進取的であり、一面又纖細なる情緒や閑寂優雅な趣を捉へ得る特徴があるが、言辭の莊嚴を誇る雄大な文學や、論理の精緻を誇る深遠な哲學を語るに不適當であるかも知れぬ。併し我々は哀感とか俳味とかと言つたやうなものにのみ満足してゐたり、或は強ひてその純一性を固執せんとする如き偏狹な態度に嚴正な檢討を加へ、もつと積極的に國語といふものの眞の將來性を考へ、諸種の外來語の如きものをも自由に取入れて思ふ存分之を鍛へて行けば、偉大なる東洋語として世界に君臨することが出来る日が来るのではないかと思ふ。新しい日本文化の創造は新しい日本語の創造と不可分離である。國語愛護の眞義はかやうなところに在るのだからうか。

右に述べた如き日本語の二大構造性に従ひ、個々の言語は二つの範類の中にそれぞれ分れて行く。即ち觀念的機構の直接的材料となるものと文法的機構の直接的材料となるものである。例へば

遙かに遠く飛ぶ雁

の「遙か」「遠く」「飛ぶ」「雁」の如きものは前者であり

飛ばせませうか。

の「せ」「ませ」「う」「か」の如きものは後者である。

象は鼻が長い。

に於て「象」「鼻」「長い」は前者であり、「は」「が」は後者である。前者は觀念語とも稱すべきものであり、後者は文法語とも稱すべきものである。而して觀念語は常に文法語に先行し、文法語は常に觀念語に後行し、兩者は相補關係にあるのである。故に觀念語を先行語、文法語を後行語などと言つてもよい。現に富士谷成章などは後者の如きものを脚結と稱してゐる。即ち構造性の場合と同様、内面的見地からは觀念語と文法語とであり、外面的見地からは先行語と後行語とである。而して觀念語にも

飛ぶ 讀む 赤い 美しい

の「ふ」「む」「い」の如く、文法機能を表示する部分があり、然も之等は何れも語の後方部にのみ

ある。又

雁 彼 百

の如きものもゼロ度^ニ之を有するものと見なければならぬ。同様文法語にも

せる れる たい

などでは、文法部に先行し觀念部的なものを認めることが出来る。

ばかり まだ だけ

などは、觀念部は比較的明瞭であるが、文法部はゼロ度である。更に

の が を に と へ は も

の如きものとなると、全く兩部が合融した形となつてゐる。併し原理的には兩部の區別を考へなければならぬ。かやうに觀念語文法語それ自身に於ても、先行的な部分と後行的な部分とが區別せられるのであるが、前者は觀念部（意義部）或は先行部、後者は文法部（形態部）或は後行部などと稱せらるべきものである。

以上の如き觀念語と文法語乃至は觀念部と文法部との區別は我が國では已に古い歴史を有してゐる。其の最初は、奈良朝前後に於て漢文訓讀といふことが創始せられ、又漢字を以て國語を表記する方法が考案せらるゝに當り、彼我の言語的構造性の相違が意識せられて國語の文法的要素の多く

に特別の取扱をしなければならないことがわかつた時である。その中漢字を以て國語文を表記する方法は、結局宣命書などと言つた技術的なもので終つてしまつたやうであるが、漢文訓讀の方法は現存の點圖に見られるやうに、點法とも稱すべき一種の組織に進展してゐたのである。かやうなものを承け之を眞に日本語の上で見る立場に立つたものが中世の歌學である。併し歌學的認識に於ては手爾波大概鈔などに見られるやうに、其のことばとてに、を、は、との區分原理は漢文訓讀の點法とも異なり、又現在普通に考へられてゐるものも異なる。かやうな區分原理を後に至つて鈴木朗がその言語四種論に於て展開せしめてゐる。即ち彼は、ことばは物事を指す言語の客觀的要素、てに、を、は、心の聲即ち言語の主觀的要素であると考へてゐるのである。かやうな區分原理を定立することが出来たといふことは、言語に對して極めて鋭い直觀力を有して居たと言はなければならぬが、併し「獨立チテ詞ヲ離レタルテニヲハ」「詞ニ先タツテニヲハ」の如きことを言つてゐるところから見ると眞に言語の主觀的要素と稱せらるべきものと、然らずして單に言主の主觀的狀態を表示するものとを混同して考へてゐたやうに思ふ。眞に指すところなきものと未だ何等か指すところあるものとを同一範疇に入れて考へてゐたと思ふ。前者は社會的歴史的なる言語そのものの主觀性を直ちに表示することを本體とするものであり、後者は個々の言衆の主觀的狀態を吐露することを本體とするものであつて、兩者は明かに區別しなければならぬ筈のものである。近世の本居派の考へ方といふも

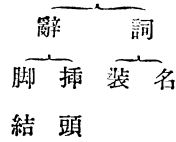
のは、大體中世の歌學者流の考へ方を繼承發展せしめたものであるが、更に之を合理的に組織立て體系づけようとする傾向に進んで行つた。言ふまでもなく、此の推進力となつたものは宣長の組織とか玉の緒とかといふやうなもの、或は春庭の八衢や通路の如きものであつたが、之等は何れも單なる事例の羅列ではなくて、常に何等かの範式を立て法則的なものを設定しようとしてゐるのである。かくて詞と辭との區別の如きも、前者を言語の非法則的な質料的要素の如く考へ、後者を言語の法則的な形相的要素の如く考へてゐた様である。併しそれは前代の歌學的な考へ方を脱却せざる限り未だ雜駁なるものに過ぎず、殊に權田直助の語學自在に至つても尙、下辭に對し上辭といふものを設け、然も面白い事には此の上辭を又體言の中に入れてゐる。之がやがて岡澤鉦次郎氏の準體言などといふものになる道行である。とは言へ、詞と辭との區分内容が今日一般に考へられてゐる如きものとなるには、その間に西洋文典の介入がなければならなかつた。西洋文典による長き鍛鍊を経て今日普通に考へられてゐる如き詞と辭、ことばとて、にをは、との區別意識が成立したのである。然し翻つて考へて見るに、かゝる西洋文典の流入がなくとも、實は中世の歌學的文法學の殿將とも言ふべき梅井道敏などは已にかやうなことが明瞭に分つてゐたやうである。それらを承けて實に秩序ある體系を定立し偉大な業績を残したのが富士谷成章であつた。西洋文典などと言ふものよりは、源流を此處に求めなければならぬのである。然るに惜むらくは其の眞價を認識して之を紹述する

ものなく、只徒に過去の一業績として残されて來てゐたのである。ひとり山田孝雄博士は夙からよく其の眞義を洞察せられ、之をその文法學說に採用せられたのであるが、それ以來漸く世人の注目するところとなり、今日では誰しも成章の深遠なる學理を了解し得るやうになつたのである。併し成章が

名を以て物をことはり、装をもて事をさだめ、挿頭脚結を以て言葉を助く。

(あゆひ抄、おほむれ上)

などと言つてゐる文脈から察すれば、或は



の如く考へてゐたやうにも思はれ、ともかく原理的には中世的なものを抜け切つてゐないのではないのかと思ふ。山田博士は之等の缺點を修補せられ、更に脚結の中から接尾辭の如きのは勿論、普通に助動詞と稱せられてゐる複語尾をも撤去せられて、之を關係語として觀念語に對立せしめられたのである。併し私は嚮に述べた如き關係によつて、山田博士が挿頭的なものを觀念語の中に包攝せ

しめられ、副用語として自用語に對立せしめられたことに對しては滿腔の賛意を表するものであるが、脚結に就いては大體成章の考へてゐたものの方がよいのではないかと思ふ。脚結といふその名の示す通り成章は先行的要素に對して後行的要素といふことを考へ、それらを一括しようとしたものであらうと思ふ。先行的要素後行的要素といふ考と共に觀念的要素文法的要素といふ考が併存してゐる。例へば装に對する取扱がそれである。之は言ふまでもなく中世のてにを、はの考へ方に系統をひくものである。併しそれは装そのものを問題としてゐるのではなく、視點はその語尾に在るのである。一般に中世歌學のてにを、はに對する考へ方といふものは、ヴァンドリエスなどの言ふ *sémanèmes* に對する *morphèmes* の考へ方に似てゐる。併し獨立的材料である語とその語の部分とは區別しなければならないのである。又挿頭の如きものをてにを、はとか辭とかいふやうなものの中に包含せしめる考へ方は、中世近世に通ずる文法學の癥であるが、之は嚮にも述べた如く、客觀的要素に對する主觀的要素といふ考へ方が不徹底であつたことに起因するものであつて、はつきり訂正して置かねばならないのである。

日本語の構造的な根本原理は先行素はより觀念的であり、後行素はより文法的であるといふことであり、それが分れて先行的に働く觀念的構造と、後行的に働く文法的構造とになるのであるが、

それらにも亦種々の區別をしなければならぬ。觀念的構造にも文法的構造にもそれ／＼種々の構造的性格が考へられるのである。そこで先づ前者の方から考察して行く。

或觀念的要素が他の或觀念的要素に先行し之と相關係するには、先づ一が他に従屬するか或は兩者が對立のまゝであるか、二つの中の何れかでなければならぬ。



前者を從屬關係にある構造、後者を對立關係にある構造と稱して置く。從屬關係には又異なる二つのものを區別しなければならない。例へば

白い月　少し白い　白く光る

光る月　月の光

の如き關係は先行要素が後要素を修飾限定してゐるのである。即ち「白い」といふ觀念が「月」の屬性を限定し「少し」といふ觀念が「白い」といふ觀念の程度を限定し、白く」といふ觀念が「光る」

といふ現象の有様を限定し「光る」といふ觀念が「月」の有様を限定し「月の」といふ觀念が「光」といふ實體を限定してゐるのである。又

五時に起きる。 空を飛ぶ。

大阪へ行く。 筆で書く。

の如き關係は先行素が後行素を補充してゐるのである。即ち「五時に」「空を」「大阪へ」「筆で」の如き實體觀念が種々の仕方で後行の「起きる」とか「飛ぶ」とか「行く」とか「書く」とかと言つた動作觀念を補充してゐるのである。前者を修飾關係にある構造、後者を補充關係にある構造と稱して置く。對立關係にも亦異なるものを區別しなければならない。例へば

甲は甲である。 これは間違だ。

君の帽子はどれですか。

見事な花が咲いた。

の如き關係は先行素が後行素に對立し乍ら一に統合せられてゐるのである。即ち

(甲) : (甲)

(これ) : (間違)

(君の帽子) : (どれ)

(見事な花) : (咲く)

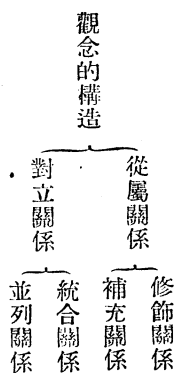
の如く一應は對し乍らも、直ちに Copula 的に統一せられ命題の形を成すものである。又

甲と乙と……

桃も梅も李も……

花咲き、鳥啼く。

の如き關係は先行素が後行素に單に並列せられてゐるものである。並列と言つても勿論その間には種々のものがあるのであるが、ともかく前者の如く、先行素が後行素に對結し一つの新たな思想を成立せしめる如きものでなく、兩者が只對立的に結合してゐるに過ぎないものである。前者を統合關係にある構造、後者を並列關係にある構造と稱して置く。故に觀念的構造或は先行的構造といふものの大綱は大略次の如きものであると考へる。



而して之を更に細別すれば又種々のものに分れて行くのであるが、それらは皆外的表徴として然るべき様々の文法的要素が添加せられ、何れも言語としての面目を保つてゐるのである。即ち觀念的構造一般は先行的展開といふ語序の外表を執るのであるが、其の細別は語形變化とか膠着素とかといふ實質的外表を執ることによつて行はれるのである。之等に就いては又後で述べることにする。

かやうな言語の觀念的要素の相關々係につき夙くから着眼してゐたのはイエスペルセンであらうと思ふ。周知の如くイエスペルセンはその著「文法哲學」第八章に於て junction と nexus とに就いて述べてゐる。junction といふのは、例へば

a very beautiful lake

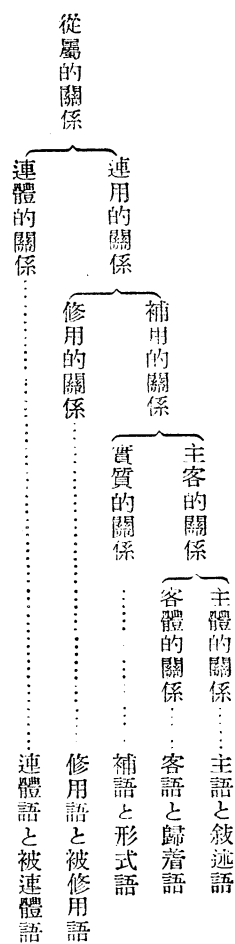
a furiously barking dog

の如きものであつて、それ／＼一個の idea を表示するため、very とか beautiful とか或は furiously とか barking とかいふものを先行せしめてゐるのである。かやうなものが

The lake is very beautiful.

The dog barks furiously.

となれば、それは nexus である。即ち lake といふ實體と beautiful といふ情景、dog といふ實體と barks といふ動作とはそれ／＼別個の ideas として對立的に結合してゐるのである。前者は私の言ふ修飾關係であり、後者は統合關係である。併し此の二つだけで言語の觀念的構造といふものは完全に説明が出来ぬ。勿論 junction と nexus とは言語の觀念的要素關係中最も特色的で重要なものに相違ないが、之を以て總てを統率しようとすることは可成無理であらう。それよりも松下大三郎氏の



(改撰標準日本文法、六三九頁照)

の如き考へ方は日本語に關する限り適當であるかも知れぬ。併しかやうな考へ方を押進めて行くといと遙かに 本當に綺麗

の如き連副詞的關係などといふべきものも挙げなければならぬこととなる。現に森本治吉氏は萬葉集中の格助詞「の」「が」の用法を説明する際、連體の用法、連用的用法と並べて連副詞の用法といふものを擧げてゐる。(萬葉集講座・第三卷一〇六——一二二頁照) 又、補用的關係、修用的關係の外に連用的關係の一種として

白く美しい。 通り過ぎる。

の如き同格的な關係がある筈である。更に

主客的關係
主體的關係
客體的關係

などといふことは、只分類のための分類に過ぎない。此の外尙細かい點に就いても言ふべきことがあるが、要するに論理が未だ事實を眞に貫通してゐないと思ふ。小林英夫氏が紹介せられたイエルムスレウの「一般文法の原理」中に説いてある制辭法 (rection) はかやうなことに對し形態論的考察を試みたもので極めて示唆に富むものである。今之を要約して示せば略次の如くである。

一、單純制辭法 rection pure (一致 concordance) 依存要素の形態部が依存關係を特殊化することなく示すに過ぎないもの。

(a) 單純一致 concordance pure

依存要素の形態部が單に制辭要素との機能關係を示すに止まり、被制辭項の意義に係はらないもの。
例、性。

(b) 複合一致 concordance complex

依存要素の形態部が單に制辭要素との機能關係を示すにとどまらず、なほ制辭要素の形態部とその意義を同じくするもの。

例、格、人稱、數、指定、對象活用、「構成語態」。

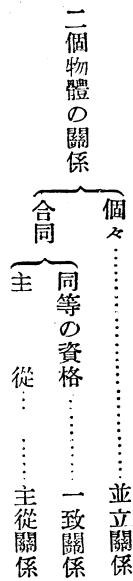
二、複合制辭法 rection complex

依存要素の形態部の意義が二重である。即ち (a) 依存關係そのもの、(b) その依存關係の特殊的性質。
例、動詞及前置詞における對象辭の制辭法、動詞による副詞の制辭法。

先づ單純一致といふのは制辭的要素が被修飾的要素で、修飾的要素が被制辭的要素である關係に在るものである。又複合一致といふのは制辭的要素と被制辭的要素とが同格的に對立する關係に在るものである。之等に對する複合制辭法といふのは、本質的には單純一致に類するものと思はれるがその間に種々の特殊關係を認め得るものである。即ち私が嚮に擧げて置いた日本語の觀念的構造と比照して言へば、單純一致は修飾關係、複合一致は統合關係、複合制辭法は補充關係に略該當するものである。山田博士の説かれる

主從關係
一致關係
並立關係

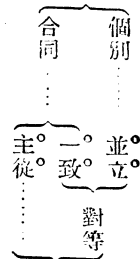
は、右のイエラムヌレウなどの考へ方と大部分重なり合ひ、一部分に於て喰違ふものであり、又イエスベルセンの junction と nexus とに並立關係を加へた形のものであると考へることが出来る。山田博士は最初之を



(日本文法講義三一五頁、及日本口語法講義二二五頁照。日本文法論一三一二頁所載のものは用語上多少異同があるが、同様の考のものとして見て差支ない。)

の如く考へて居られたが、最近

二個物體の外延上の關係



二個物體の内包上の關係

(日本文法學概論 六一〇頁)

の如く、舊來の所謂外延上の考へ方に更に新たに内包上の考へ方を結付けて論理の完璧を期して居られる。併し對等に個別的對等とも稱すべき並立と合同的對等とも稱すべき一致とがあると同様、主從にも合同的な主從の外に個別的な主從もあるのではなからうか。又合同に主從的對等とも稱すべきものと對等的合同とも稱すべき一致とがあると同様、個別的にも對等的個別とも稱すべき並立に對し主從的個別とも稱すべきものがあるのではなからうか。之を圖式で表せば次の如くである。



隨つて

個別的對等 (對等的個別) 並立
 合同的對等 (對等的合同) 一致

個別的主從（主從的個別）……………（ ）

合同的主從（主從的合同）……………主從

となり、個別的主從或は主從的個別に當るものがなければならぬやうに思ふ。之が即ちイエラムスレウの複合制辭法に關するものであり、私の言ふ補充關係の如きものに外ならない。併しイエラムスレウの制辭法では、並立といふことに對して何等觸れるところがないやうである。此處に於て私は嚮に擧げたやうに四範疇を立てる譯である。而してその中修飾關係と補充關係とは先行素が後行素に從屬依存するものであるが、前者は内屬的であり、後者は外附的である。又統合關係と並列關係とは先後兩要素の對立關係であるが、前者は copula 的統合素によつて結合せられ命題の形を成し創造的であり、後者は單なる對結である。

以上の如き觀念的構造に從つて觀念語を種々に範疇づけることが出来る。先づ從屬關係の先行部である從屬素としてのみ其の機能を果す從屬語又は修飾語と、相互に獨立的で相對立して結合することに依つてそれぐの機能を果すことを本性とする獨立語或は對立語とも稱すべきものとに分つことが出来る。前者は後行する何物かに依存し附庸することに依つてのみ觀念的展開構造に寄與し得る、謂はゞ副用的伴示的な觀念語である。後者は之に反し主用的自示的である。併し主用的自示的であると言つても孤立的ではない。孤立語などといふものを立てる人があるが、かやうな事とは

全然異なるのである。孤立語などといふことは言語範疇上無意義な概念である。語文の如く語が孤立的に見える場合もあるが、それは現實に於てはも早用例の一種に過ぎない。かやうな事を以て語の本質を考へてはならぬのである。然も語文も常に何等かの形でそれに種々の文法素が添接してゐるのであるから、全然孤立的と考へることも出来ない。又孤立語と雖も勿論用法的に他の要素に從屬する場合がある。併しそれは獨立語相互の關係で、決して從屬語に依存し附庸するやうな事がないのである。之と反對に從屬語は獨立的に使用せられる場合は絶対にない。從屬語はどこまでも從屬的に使用せられるのである。

ごろ／＼ どん／＼ する／＼

の如きものや

おや あゝ まあ うん

の如きものは、單にその儘では動物的言語に過ぎない。必ず何等かの後行素を豫想して發せられるものでなければならぬ。かゝる獨立語に對する從屬語に就いて古來多くの學者は誤認してゐた。而して一般に行はれてゐた考は之をてにをはの一種と見てゐたのであつた。之は嚮にも述べて置いたやうに、言語主觀と言主の主觀とを混同した結果である。かやうな事に矛盾を感じてか、所謂辭の範類から之を排除しようとする傾向になつたのであるが、遂に所謂詞類の中に收められ然も準體

言の如きものと考へられるに至つた。併し從屬語を獨立語に準じようとすることは抑、一種の誤魔化しである。從屬語はどこまでも從屬語として論じて行かねばならない。かやうな事を眞に認識して居た最初の人**は梅井道敏であると思ふ**。彼は「てには綱引綱」に於て

近代てにはの諸注に魂を入るてにはとてたゞ猶さへたになといとゝ等を出せり。この説いかか。さへたにはてにはにて唯猶なといとゝは詞なるを相混して抄出せる、その理なきに似たり。

之は言語主觀の表徴である文法語から、觀念語の**一類である言主主觀を表徴する從屬語を區別したものである**。その後道敏は「蜘蛛のすがき」に於て「唯」「猶」の如きものを虚字と名づけて説明してゐるのである。併し之を一層組織的に展開するに至つたのが富士谷成章である。即ち彼は言語を名、装、挿頭、脚結の四種に範類してゐるが、その挿頭と稱するものはつまり從屬語である。而して「かさし抄」三卷九十六條は之が具體的説明を試みたものである。勿論その一々に就いて詳細に検討すれば、種々の難點もあるにはあるが、文法語としての脚結と區別し、觀念語の一類として名装等に對立せしめ堂々之に就き一書に纏め上げ、然も常に他の要素に先行して用ひられるといふ特性を認め之をかざしと稱し得た卓見は空前絶後と言つてもよい。

自示的對立的な獨立語に就き陳述語と實體語とを認める事は比較的容易に行はれたやうである。メイエやヴァンドリエスの如き懷疑的態度を持する人々ですら動詞と名詞だけは明かに認めてゐる

のである。我が國でも已に中世に於て物の名は詞と異なる言語的要素として分立してゐたやうである。かやうな事が一方成章の名装の別に、他方は一般的に行はれた體言用言の二範疇に發展して行つたのである。併し體用の別も後には語形變化の有無といふ一點にのみ着眼されるやうになり、用言は活用語、體言は不活用語といふ風に考へられるやうになつてしまつた。果ては辭から排除された從屬語の如きものも不活用的であるといふ所から、準體言などと稱せられるやうになつたのである。一體獨立語のかゝる區別は語形變化の有無などといふことで到底爲し得べきものでないといふことは、西洋諸國の言語の *declension* と *conjugation* といふことを見てもわかる。又語順の先後といふこともかゝる對立的要素に對しては何等區分原理となるものでない。例へば統合關係や補充關係では

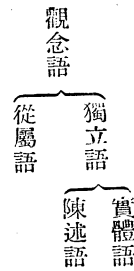
花が咲く。 大阪へ行く。

の如く實體語は先行し陳述語が後行するが、

咲く花 白い月

の如き修飾關係では、常に陳述語が先行し實體語が後行するのである。兩者の地位は全く對等的である。然らば之を區別すべき原理は何處に在るかと言へば、山田博士の言はれるやうに心理的には統覺作用と概念作用との別がある。併し之を言語の構造的性の上から言へば、陳述語といふのは統合

關係の因子として陳述を成立せしめる語であり、實體語といふのはかゝる陳述の主題となり補足をなし得る語である。



三

文法的構造は前述の如く次第に後方に發展する性質のものであるが、我が國では古來かやうな事に就き先づ詞の切れつゞきといふ事が言はれて來た。例へば道敏の綱引綱に

てにはの義數品^{すひん}あるやうなれど所詮^{しよせん}は切と續^{つづ}くとの二つ也。文章に句讀^{くよ}あるがごとし。

とある。てにはは略今の文法形態であるが、道敏はこのてにはの切れつゞきを文章の句讀に關係づけて説明しようとしてゐる。その句讀といふのは太宰春臺の「倭讀要領」に

句讀トハ句ギリナリ。語ノ絶ル處ヲ句トイフ。語ハ絶ザレドモ文ノ屬ノ長キ處ハ其中ノキリテヨキ處ニテ幾處モキリテ讀ムヲ讀トイフ。

とある如く、詞の斷絶する點が句であり、句中の意味關係を明瞭にするため適宜之を句切ることが

讀である。之によつて詞の切れつきといふことは如何なるものであるか、略分るのであるが、本居宣長は「詞の玉の緒」に於て更に具體的な事例を以て詳細な説明を下してゐる。曰く

すべての詞づかひに切るゝところとつゞく所とのけちめあることを、まづわきまへおくべし。是を上の件にいへる「ぬ」「つ」「る」と「ぬる」「つる」「るゝ」との例にていはゞ、「花さきぬ」「鶯なきつ」「もみち葉ながる」などゝいふたぐひの「ぬ」「つ」「る」は切るゝ辭なり。これを「櫻花散ぬる風」の云々、「鶯の鳴つる枝」を云々「もみちばのながるゝ川」に云々などゝいふ時は「散ぬる風」「なきつる枝」「ながるゝ川」とやうに下へつゞけば「ぬる」「つる」「るゝ」などはつゞく辭なり。「ちりぬ風」「なきつる枝」なかるゝ川などゝはつゞきがたし。又「花ちりぬる」「鶯なきつる」「もみちばなかるゝ」などいひては語切れずと心得べし。かくのごとくたゞにぬるゝつるゝといひても切るゝことゝ思ふは、後世人のひがことなり。そのよしは下にくはしくいふべし。かくて此切るゝ辭はことゞく紐鏡の右行の段々にあり。つゞく辭は中行の段々にあるなり。件の「ぬ」「つ」「る」と「ぬる」「つる」「るゝ」との例に准へていづれをも考へさとるべし。さて、又切るゝ所もつゞく所も同じき詞もあり。聞成待言知キナスツイシなどの「く」「す」「つ」「ふ」「る」のたぐひ、又「ん」「らん」「なん」などの類なり。これらは詞のつらねざまにしたがひて、切れもつゞきもするなり。ひも鏡の第卅三段「く」（右行）「け」（左行）より終りの「てん」（右行）「てめ」（左行）まで、合せて十一段の辭これなり。此十一段は皆切るゝもつゞくも同じき故に、右行と中行と一つになれり。考へ見べし。

即ち詞が切れるといふことは言語活動が斷止することであり、詞がつゞくといふことは言語活動が繼續することである。言語活動が斷止したり繼續したりすることは、やがて言語行動の斷續を意味

することは言ふまでもない。而して此の言語活動の斷續は外面的には發音作用の斷續であるが、内面的には言表作用の斷續である。内的言語活動が終結したか未だ續行の中途であるかといふことである。内面的な言表が斷止或は繼續するといふことは言語の結合關係が斷止したか繼續中であるかといふことである。言語の結合關係の斷續といふことは取りも直さず文法活動の斷續といふことである。而して文法活動の斷續はそれぐに特有な形態的工作を行ふことによつて表示せられるのである。詞の切れるところつゞくところとかてにはの切れつゞきとかといふことは、かやうなことを言ふのである。

文法活動が斷止するといふことは如何なることであるか。文法活動が斷止するといふことは文法の働が極限點に到達することである。種々に展開して來た文法關係がそこで妥結し今一步その外に出づればも早文法の働く圏外であるといふことである。文法未成の語彙的言語に直面すること、二次的言語、文法的言語の領域から一次的言語單一的記號の世界を臨むことである。かやうなことは聽て言表が一先づ結了したことを意味するのであり、言表の結了は言語活動の終結であり言語活動の終結は言語行動の完遂を意味するのである。勿論文法活動が斷止するといふことは必ずしも常に言表を完結せしめるとは限らない。文法活動が斷止し、詞が切れても未だ言ひ盡してゐない場合が多々ある。さやうな場合には又更めて言を起し、かくて縷々千萬言にも及ぶのである。併し如何に

言を連ねても言表の完全無缺を期することは到底不可能である。否、空疎な言ならば連ねれば連ねる程その心を失ふ。修辭の祕訣は言を簡素にすることであるとさへ謂はれてゐる。一念三千大世界と稱せられる心を淺薄な言語記號の點綴では蔽ひ盡せないものがある。此處に於て言表には言語面の奥に象徴面的領域が發達しなければならぬ理由があるのである。かやうに考へて行くと言語面的に完き言表などといふものは實際にあり得ないのである。その單複長短の如何を問はず、常に一先づ纏まつたといふ程度のものに過ぎない。而してその一先づ纏まつたといふことを指標するものが文法活動の斷止、即ち詞がそこで切れるといふことである。文法活動が斷止し詞が切れることが取りも直さず言表が一先づ完結する所以である。故に文法活動の斷止といふことは種々雑多な言表機構の單位を限るものと考へなければならぬ。言表は文法活動の斷止といふことによつて個々の單位的なものに斷截されるのである。かやうに文法活動の斷止は言表を單位に斷截し、隨つて言語活動も之によつて分割せられ、かくて言語行動もそれ／＼獨立的なものとして定立せられるのである。文法活動の斷止點は言ふことの意志力の表れてゐる場所である。

かやうな文法活動の斷止、即ち文法活動の極限點を文法上如何に見るべきものであらうか。私は之を文の成立する地點と考へなければならぬと思ふのである。文といふものはかゝる文法活動の斷止する地點を生産點として結成するものである。文は文法活動の完結體である。文法活動が完了し

後續の餘地を残さぬ文法的飽和體が文である。文法活動が閉止すれば言表が完結を告げ言語活動が斷絶し言語行動の目的が一先づ達成せられる。かやうなものが文に外ならぬ。文といふことに關しては從來種々に説明せられた定義づけられて來たやうであるが、少くとも文法學の上ではどうしてもかやうに考へて行かなければならぬと思ふ。而して日本語ではかやうな文を成立せしめる文法活動の斷止點は常に文の最終部位に來るのである。即ち文を前行部と後行部とに區別するとすれば、文法活動の斷止する場所が文の後行部である。日本語では、文の終末は文を決定する心臓部位である。故に日本語では他の如何なる言語にも増して此の文法活動の斷止、即ち詞が切れるかどうかといふことが重大な問題なのである。かやうなことの爲に我が國では昔から詞の切れる所に關する考察研究が盛に行はれたのである。殊に連歌の宗匠等はその携はる連歌の性質上喧しく之を問題にしたので此の方面からの研究が異常に發達したのである。即ち連歌は紹巴の至寶抄に

歌と連歌と少かはり申候。歌は上の句に其意聞之候はねども下の句にて斷申候事おほし。連歌は一句一句に其ことわりなくては叶はざる事候。

とあるやうに、歌では上下の句を合せたものが一箇の詩形であつたが、連歌では上下各獨立した詩形としなければならぬ。殊にその發句は一句として完結した詩でなければならぬのである。そこで同じく至寶抄に

發句の事 第一、其時節無_二相違_一様に肝要に候。發句は百韻の初にて候へば、いかにもたけたかく、ゆうげんに、うちひろめになきやうに、發句は切字と申事、唯きれ字なく候へば、平句に相聞えてあしく候。四季の外雜の發句と申事は無_二御座_一候。俳諸も同前。

とあるやうに、季と切字とが外面的に要求せられるのである。その中切字といふのは、例へば池坊專順の專順法眼詞祕之事といふものに發句十八切字といふことを説いてゐる。それには「かな、けり、もがな、らむ、し、ぞ、か、よ、せ、つ、れ、ぬ、す、ま、へ、け、じ」の如きものを舉げてゐるが、かやうなものを用ひるとどうして發句の完全獨立を形造り得るのかと言ふと、是等の語片は何れも文法活動を斷止せしめ文を成立せしめる能力を有するからである。勿論個々の切字にはそれ〴〵何等かの意義的なものの感性的なものを有してゐるのであるが、一般的には文成立の第一要素と言ふことが出来るのである。かやうなものを適當に使用して發句といふものを然るべき餘義餘韻で彩りつゝ文法的完結體たらしめようとするのが切字の法である。併し切字の法も後世になつて著しく形式化し、發句には必ず切字を詠み込まねばならぬかのやうに唱へる人々もあつたが、之は言ふまでもなく本末を顛倒した議論で、必ずしも切字が詠み込まれてなくとも、其の句が文法的に斷止終結して居れば立派に完全な發句の詩形を成すのである。然も此の場合文法的に斷止終結するといふことは何も用言の終止形とか命令形などの如きものばかりではなく、例へば芭蕉の

桐の木に鶉鳴くなる塀の内

の如く體言を句の重心部としたものでも差支ない。是は全然切字の詠み込まれてない。謂はゞゼロ切字であるが、之も切字の一法と考へなければならぬ。心の切とか何とかと説明するのは後でつけた理窟に過ぎない。強ひて心の切と稱してもよいものを擧げるならば、同じく芭蕉の

辛崎の松は花より朧にて

の如きものであらう。併し去來抄を見ると

或人にて留りの難あらんやと云。其角答へて云、にては哉にかよふ故、截留の發句にて留の第三を嫌ふ。哉といへば句切迫れば、にてとは待るとなり。呂丸云、にて留の事は其角が解有り、又是は第三の句なり。いかに發句とはなし給ふや。去來云、是は即興感偶にて發句なる事疑なし。第三は句案に渡る。もし句案に互らば第三等にくだらん。先師重ねて云、其角去來が辯皆理窟なり。我はたゞ花より松の朧にて面白かりしのみなりと。

とある。「我はたゞ花より松の朧にて面白かりしのみなり」と言つてゐる處から見ると、芭蕉の眞意は今日の文法知識から考へられる中止法の如きものにあるやうである。中止法は完全な斷止とは言ふことが出来ないが、矢張斷止に準じて考へて行かねばならぬものである。實際芭蕉のやうな徹底した詩人になると、百の理論を以てしても到底之を蔽ふことの出来ない廣汎な例證を残して呉れて

ある。眞に言靈の妙機を體認せんとするには、些々たる巷間に流布する民衆言語の蒐集にうき身を窺すことに先立ち、昔から詩聖とか文豪とかと言はれて來た人々の言語を先づ徹底的に研究してかゝらねばならぬ。是等の人々は皆それ／＼の立場でその國の言語の力を最大限に發現せしめてゐる。言語活動の極限位に立つ人々である。此の意味から私は我が國語學界に新しい古典主義といふものの生れ出でんことを庶幾して息まないものである。言語學は今一度文獻學的原郷に省みる必要があると思ふのである。

文法活動を斷止することは文を成立せしめる所以であつたが、反對に文法活動を繼續することは如何なることであるか。文法活動を繼續することは言ふまでもなく言表の中道にあることであり、隨つて言語活動の續行中であり、言語行動の未だ完遂せられないことを意味する。併しそれは單なる連續ではない。單に連續的なものは所謂語文的な言表に過ぎない。語文的な言表に於ては文法活動の繼續などといふことは問題となり様はない。文法活動の繼續如何が眞に問題となるのは語と語とを連結することによつて何等かの表白を爲さんとする連語的言表に於てのみである。單に總體的な語文的表白に於てではなく、分析綜合的過程による言表に於てのみ文法活動の繼續が問題となるのである。故に文法活動の繼續といふことは單なる言語的連續を意味するものでなく、所謂非連續

の連續である。切れてつくことである。語彙的に切斷せられてゐるが文法的に連結せられることである。語として個々別々であるが、それが文法の力で繋合せられることである。語に分析すればそれ〴〵獨立的な觀念内容を表示してゐるものであるに拘らず、之を文法的に總括し何等かの統一的なものにすることである。言語活動の分析綜合性は語と語との關係ばかりではなく、實は文法斷止によつて成立する文と文との間に於ても認めることが出来る。文と文との間は單なる斷絶ではなく矢張前文が後文に連續し後文が前文を受けるといふことがなければならぬ。併し文と文との關係は語と語との關係と同一ではない。語と語との關係は觀念的に獨立してゐるものが文法的に統一づけられるのであるが、文と文との關係は文法的に斷絶してゐるものが思想的に統一づけられるのである。文法活動の已に完了した文が更に大なる思想的展開の要素的なものとして排列せられるのである。かやうな關係に在るものを一般に連文と稱することが出来る、文法學としての最終的なものである。勿論かゝる連文關係の中には接續詞などを介入せしめてゐるものがあり、幾らか文法的連續性を認めて行かなければならぬやうなものもあるのであるが、之等は何れかと言へば眞の文法的連續ではなく文法的連續性を觀念的なものに直した形のものである。之等が眞に文法的連續性を得るためにはどうしても復文の形を取らねばならぬのである。

言語活動は一般に分析綜合的であると言ふことが出来るが、詞が續くといふこと、文法活動の繼

續といふことは語彙的に分析される各要素が文法的に綜合せられることである。而して要素の綜合は前行後行の語順關係によつても表示せられるのであるが、最も特徴的なものは多くの場合語尾の形態的變化や種々の形態的要素の添接によつて表示せられる。即ち文法活動繼續の能記的示標として然るべき形態素的工作が行はれるのである。かゝる形態的變化或は添加は日本語では前行的要素の後部に對して工作せられるのであるが、所謂つゞく手爾波とは之である切字に對するつゞけ字である。斷止の爲に行はれる形態的工作に對する連續の爲に行はれる形態的工作である。かやうなことは文法上如何なることを意味するのであらうか。斷止の形態的工作によつて文を成立せしめるのであるが、連續の形態的工作によつて如何なるものが齎されるのであるか。文法活動斷止によつて文を成立せしめることは二次的言語文法的言語を一次的言語單一記號的言語の領域に引戻すことであつた。分析綜合過程の言語を語文的言語或は文對等語的なものと同列的ならしめることであつた。然るに今個々の語彙的要素を文法力によつて引寄せ、言語の間に文法活動を浸潤せしめることは一次的言語單一記號的言語を二次的言語文法的言語に昇華せしめることでなければならぬ。個々の第一言語を超えて之を材料化し新たな結合的言語第二の言語を產出することではなければならぬ。新しい言語領域を創造する意味のものでなければならぬ。私はかやうなものを普通に句と稱せられてゐるものに於て見ることが出来ると思ふ。句といふことに就いては、從來種々に論せられたやう

であるが、普通に考へられてゐる句、例へば英語の *change* の如きものは一般にかやうなものであらうと思ふ。少くとも文法學上句と稱せられるものは、語の如き所與的材料的な言語に對し文法活動の持續によつて支へられてゐる二次的言語文法的言語と考へなければならぬと思ふ。

句には種々雑多のものがある。先づ之を要素の組合せといふ點から言へば、嚮にも述べたやうに二項的統一式でなければならぬ。一體物が相關係して一となる爲には、常に二項的でなければならぬ。二を一にするといふことでなければならぬ。雑多の統一といふことも只漠然と多が一となることとでなく、複雑な階梯を経て二項的統一が行はれて行くことに外ならぬ、即ち二が一となりかゝる一が他の一と對立して更に一に歸し、或は二が一となつたもの同志が相對立して一に結體し、かくして次第に複雑多岐なる統一體系が成立して行くのである。結合の根本原則は二元的相關である。三つ四つのものが同時に結合するといふやうなことは絶對にあり得ない。結合とか統一とかといふことは矛盾するものが一となることであるが、矛盾といふことは二つのものの間に於てのみ言ひ得ることである。一なるか多なるか、自なるか他なるかなどといふやうな二者擇一的にして絶對に第三者的なものの介入を許さぬ關係が矛盾であるが、かやうな矛盾は二つのものの間にのみ存する事柄でなければならぬ。而して結合するとか統一されるとかといふことは、何等かの意味でかゝる矛盾關係に立ち相互の間が斷絶されてゐなければ無意味である。右の様な譯であるから、種々の要

素が結合して句を成す最も基本的な有様は二項的結體でなければならぬのである。例へば

(花が)+(咲く) (本を)+(讀む)

(白い)+(壁) (短く)+(切る)

の如く結合してそれ／＼の句を成してゐるのである。又

(花が)+(〔(見事に)+(咲く)〕 (壁を)+(〔(白く)+(塗る)〕

(大工に)+(〔(家を)+(建てさせる)〕

〔(白く)+(淡い)〕+(月) 〔(遠く)+(飛ぶ)〕+(雁)

〔(随分)+(短く)〕+(切る)

〔(花)+(咲き)〕+(〔(鳥)+(啼く)〕

〔(これは)+(〔(氣に)+(入らないから)〕)+(〔(あれに)+(しよう)〕

〔(花の)+(咲かない)〕+(木と)〕+(〔(咲く)+(木)〕

の如く、それ／＼二項的累加として句が成立して行くのである。

句の要素の結合は二項式を基本として行はれ常に二單位的結合であるが、その前行後行兩要素の結合關係には又種々のものがある。それらの中最も包括的なものは嚮に述べて置いた

修飾法 補充法 統合法 並列法

の四方式である。この四つの關係方式を大綱とし、その先行後行兩要素のそれらの性質如何によつて又様々な特殊方式に分れて行くのである。随つて具體的には種々雑多な形式の句が成立する譯である。而してかやうな句の成立因素、即ち文法活動繼續の爲の形態素は日本語では常に先行的要素の後部に於て屈折又は添接せられるのである。上の四つの關係方式の中で統合法によつて成立する句は特異なものである。一體並列法は類似的な二つのものが個々別々のまゝで結びつけられてゐるに過ぎないものであり、修飾法と補充法とは内屬外附の別があるが兎に角一が他に從屬するもので、前者と正反對の關係にあるものである。即ち前者は二つのものが二つのまゝ單に對立結合を爲してゐるのであるが、後者は一方のものが全く他の一方のものに隸屬してしまつてゐるのである。

然るに統合法は全然性質の異なる二つのものが一旦對立しそれが相互に限定し合つて一つのものとして統合されるもので、謂はゞ模式的な分析綜合の過程をとるものである。並列法とか修飾法補充法は二つのものが二つのまゝか、或は二つのものゝ或一つに支配され結局何れかの一つのものに歸せられる如きものであつたが、之は二つのものが雙方對立的に結體し別に新しい一つのを創造するもので動的力的である。觀念相互が力闘し思想を生むものである。二つの觀念が二つの觀念として結合され、或は一つの觀念に歸着するものでなく、二つの觀念が判斷關係に立ち命題の如きものを成立せしめるのである。かやうなものは譬ひ文法活動が斷止し詞が切れてゐなくても思想内容

としては完全なものと言はねばならぬ。勿論嚴密な意味での完結思想とは言ひ得ないが内容關係として全きものであると言はねばならぬ。言語斷止の力を借りることなく觀念活動自體として内面的に完結したものである。併し之を以て直ちに文法活動斷止によつて成立する文と同一視すべきものでもない。思想内容として完全であつても、言語的に獨立し言語行動の完遂體にあらざる以上文と見ることは許されない。私はかやうなものを時には思想句命題句或は準文文肢などと稱し、普通の觀念句と區別したいと思ふ。

四

以上我が國で昔から謂はれて來た詞の切れつきといふことの意味を概略説明したのであるが、要するに詞が切れるといふことはそれが文を成立せしめることであり、詞がつくといふことはそれが句を成立せしめることである。即ち詞が切れれば文法活動が斷止し、二次的言語文法的言語として展開して來たものが停止して一次的言語語彙的言語に還元し、獨立的完結的な文を產出して一つの言表的單位となるのである。又詞がつくれば文法活動の繼續により一次的言語單一記號的言語が展開して二次的言語文法的言語を成立せしめて行き、分析綜合的な句を產出してそれが言表の部分的要素となるのである。日本語では前者の如き文を結體成立せしめる要素は普通その後方に置か

れ、それ〴〵の要素を究極的に統括して居り、後者の如き句を形造つて行く諸要素は次第に前方に配置せられ、その言表内容を複雑にしてゐるのである。而してかゝる諸要素は何れも、その後部に於て屈折するなり助詞助動詞の如きものを添加するなりして、それ〴〵然るべき形態部的工作が施されてあることは言ふまでもない。例へば

(花) + (が)

(見事) + (に)

(咲) + (く)

(大工) + (に)

(家) + (を)

(建) + (て) + (させる)

の如きものである。言表はかやうなものが様々に組合せられて分節的に展敍せられて行くのである。かやうな切れる詞つゞく詞、即ち文を成立せしめる要素と句を成立せしめる要素とは單なる材料的な語と異なる一種の單位でなければならぬ。かやうなことは從來餘り注意を拂はれなかつたやうであるが、私はそれは學者の手落ちではないかと考へる。一時盛に論議せられた

靜かに

賑かに

泰然と

斷乎と

などの「に」「と」を活用語尾の如きものとすべきか、或は又副詞の助詞と考ふべきかと言つたやうな疑問も、元はかやうな區別がはつきりしてゐなかつたところから起つたのではなからうか。一體材料としての語と、文や句を成立結體せしめる要素となつてゐるものとは何處にその相違點がある

かと言へば、前者は形態部的工作が未定的であるが、後者は形態部的工作が決定的であるといふ點に存するのである。譬へて言へば、家を建てるに就いては、石とか材木とかといふものが必要であることは言ふまでもないことであるが、言表に對する語の地位といふものは、恰もかやうな建築材料としての石や材木などに該當するのである。さていよく家屋を組立てようとするためには、石とか材木とかといふ、謂はゞ素材的なものを其の儘に用ひるのではなく、之を土臺石に切るとか、柱とか棟とかいふものに造るなりして、素材的なものに何等かの工作を施してかゝらなければならぬ。文や句を成立結體せしめる要素的なものといふのは此の土臺石や柱棟に相當するのである。かやうな譯で兩者の間に明瞭な區別がある筈であるが、之等を混同した頭で「靜かに」とか「斷乎」とかといふやうな取分け用法の狭いものを考へるのであるから、その「に」や「と」が或は活用語尾に見えたり或は助詞に見えたりして容易に決着しないのである。

「靜かに」の「に」「斷乎と」の「と」の如きものを活用語尾とすべきか或は助詞とすべきか、この問題を解くことが今私が、ここで言はうしてゐる事柄の核心に直接觸れることになると思はれるので、多少傍道に逸れる嫌がないでもないが、少しく之に就いて論じて置きたい。「靜かに」「斷乎と」の「に」「と」を活用語尾の如きものと考へようとする論は言ふまでもなく之等を一語と認めようとするのである。その理由とする所は「靜か」とか「斷乎」とかといふものはそれ自體で獨立に

使はれることがなく、常に「靜かに」「斷乎と」といふ形、即ち「に」や「と」に導かれた形で用ひられてゐるといふにある。併し

靜かな海。 實に靜かだ。

大分靜かです。 靜かでよい。

中々靜かである。

いと靜かなり。 靜かなる海。

斷乎たる決心。

の如き用法もある。所がこの論者の多くは之等を一括してカリ活と稱せられるものと共に形容動詞といふ新しい語範疇を立てようとするのである。形容動詞を立てることの可否は暫く措くとして、次に

遙か向かふに はる／＼来る。

斷乎排撃せよ。 自然さうなる。

の如く「に」や「と」の附かない用法も擧げることが出来る。併し論者は又之等を歴史的に考へて後世に「に」や「と」が落脱した第二次的な略體であると言ふのである。果して如何。更に

必要の品 徒の言 實のところ

自然の事 うたての振舞

の如き「の」に導かれた用法もある。之に就いて或人は誤用であるとも言ひ、又或人は名詞的な用法であるとも言ふのである。

以上は「静か」とか「斷乎」だけでは名詞などのやうに完全獨立ではない、そこで之に添接せられる「に」「と」の如きものと合併したものを以て一語と見做さなければならず、随つて「に」「と」はその語尾でなければならぬといふやうな先行的意義部から後行的形態部を眺めるやり方であるが、次に之と反對に後行的形態部から先行的意義部を眺める方法を探つて考へて見ようと思ふ。それには先づ「に」「と」が或意義的要素に添接せられた場合には之に内屬して、一つの語を形成し得る性質のものであるかどうかを考へて見なければならぬ。例へば

白む 赤らむ 黄ばむ

大人ぶる いやがる 神さぶ

女々しい 男らしい

の「む」「らむ」「ばむ」「ぶる」「がる」「さぶ」「しい」「らしい」のやうな成語的要素と、この「に」

「と」とが同様のものであるかどうか。私にはどうしてもさうと思はれない。寧ろ之は

八時に始まる。 間に挟む。

秋になる。

白となる。 惡魔と變る。

山と積む。

の如く使はれる「に」「と」と略同様なものであると思はれるのである。若しさうとすれば之は位格表示の助詞と見なければならぬ。位格を示す助詞は言ふまでもなく文法語として完全に獨立する性質のものであるが、若し「靜か」「斷乎」の如きものが非獨立的なものであるとすれば、獨立的なものが非獨立的なものに附屬することとなるのである。のみならず位格表示の助詞の一般的性質として常に獨立的な觀念語に添接し之を以て句の要素たらしめるのである。即ち成語要素などとは正反對に、語として獨立的なものに添接することにより、其の語の獨立性を破壊し要素的なものの部分的なものに仕立てるのである。故に少くとも位格的な助詞の系統を引いてゐる「靜かに」「斷乎と」などの「に」「と」は、之を添へたが爲に決して語として獨立的なものとなるのではなく、却つて「靜か」「斷乎」などの本來的獨立性を奪ふ結果となるのである。然も「に」「と」は常に獨立語にのみ添加せられる性質のものであつて見れば「靜か」「斷乎」などは元來獨自な語と見做さねばならぬのである。「靜か」「斷乎」の如きものを獨立的な語と見れば、所謂形容動詞として體系づけられてゐる諸活用形は、之等の語の主要なる用法形態であると見ることが出来る。即ち之等の語が言表の要素的な

ものとなるには、多く形容動詞體系として示された形態に工作せられて行はれるものと考へなければならぬ。謂はゞ形容動詞體系は用法的な範疇體系であるのである。併し「静か」や「斷乎」の如きものは本來的に獨自な材料であるから單獨に用ひられるやうな場合もあれば又名詞的な用法も可能なのである。之は恰も數詞や抽象的な意味の名詞が時には副詞の如く用ひられることがあるのと同様である。今若しかやうな事情を強ひて打消し、カリ活などに準せんが爲にナリ活とかタリ活などといふものを考定し、形容動詞を何處までも立てようとするならば、之を推進めて行くと今度は名動詞などと稱せらるべきものをも立てなくてはならぬのである。或は名詞は「の」「が」「に」「を」「と」「へ」「より」「から」などを附けることが出來ると言ふかも知れぬが、それならばそれ等全部を包括して名詞の複雑な格體系を組織することも出來るのである。併しかやうなことをすることは果して日本語を眞に體系づける所以であらうか。一體カリ活などといふものも鈴木朗の言語四種論あたりから發出してゐるやうであるが、餘りに形に執はれ過ぎた考へ方ではなからうか。然もカリ活は「くーあり」の約ではなく形容詞の加行系統第一活用「か」に再語尾「り」が膠着したもののやうである。恰も現存の「けれ」が「け」に「り」が膠着した形の名残であると考へられると同様である。して見れば、カリ活自體が已に獨立的に立てらるべき性質のものでなく、形容詞活用體系の中に包括せらるべきものである。又さうした方が口語とか種々の方言に於ける之等の事實を

考へる場合却つて便利であると思ふ。かやうに形容動詞の根幹とも言ふべきカリ活ですら其の獨自性が問題とさるべきものであるが、況してナリ活タリ活等に至つては、之を語として眺めようとすれば恰も寄木細工のやうなものである。

日本語は膠着語（漆着語）或は接續語であると言はれてゐるが、かやうな言語にあつては、先づ觀念語と文法語とが明瞭に相分れてゐて、それらが實際に用ひられる言表要素となる場合、觀念語に文法語が接合し、所與的な語材料的な語と異なる形成的要素的な言語單位を形造るのである。勿論一見さうでないもの、例へば

これ幾ら。 僕參りません。

花咲き、鳥笑ふ。

あはれ、あな おもしろ。 あな さやけ、をけ。

の如きゼロ形態的なもの、或は

花咲き、鳥笑ふ。 行く春。

とく行け我が子。

の如く形態的表徴があつてもそれが自生的なものもあるが、之等をも含めて、一般的に所謂實辭的のものゝ虚辭的のものゝとの接合によつて語とは異なる意味の種々なる單位が形造られることによつ

て行はれるのである。私はかやうなものを節と稱するのである。所與的材料的な語に對し形成的要素的なものを節と稱するのである。即ち前の例を以て言へば「靜かに」「賑かに」「泰然と」「斷乎と」の如きものは節と稱せらるべきものであつて、語ではない。觀念語「靜か」「賑か」「泰然」「斷乎」等に、文法語「に」「と」等が接合せる節である。「靜かなり」「賑かなり」「泰然たり」「斷乎たり」「靜かだ」「賑かです」の如きものも又同然である。

文が成立するにも句が結體せられるにも、材料的なものとして與へられた語が直ちに然成るものではなく、觀念的意義的なものに文法的形態的なものが接合し、一旦かゝる節の過程の介入といふことがなければならぬ。故に文とか句とかいふものは直接的には節の分合過程であると考へてよい。述べるといふことは節の延展であり、分るといふことは節に分析することである。材料的な個々の語は要素的な種々の節となり、そこに於てそれの機能を実現するのである。語は潜在的待機的言語であり、節は顯在的實演的言語である。語は靜的であり節は動的である。語は言語體系としての分節單位であり節は言語活動としての分節單位である。體系として潜在待機してゐる語が實際に役立てられるためには、必ず節の形をとらねばならぬのである。語が節となつて始めて然るべき機能を実現するのである。

文法的構造には右の如き節形成の爲のものの外に語を再造する意味のものがある。節形成の斷續

法は語の用に關するものであるが、之は語の體に關するものである。即ち前者は語の性質に従つて種々に文法的工作が行はれるのであるが、之は語の本質的核心そのものに種々の改裝を加へん爲に然るべき文法的工作が行はれるのである。文法的工作が單に語の文法部位に對して行はれるばかりではなく、外郭的ではあるが觀念部位にも何等かの影響を及ぼし、その語を動搖せしめ之を改變再造せんとする意味のものである。勿論之には種々の程度のものであるが一般的には節を成すものに對し成語的のものとして區別しなければならない。此の種のものには語の文法的機能に改裝する性質のものと、語の意義内容を單に裝定するに過ぎないものがある。前者は例へば

行かれる 行かせる 行かない

行きます 行つた 行くまい

行かせられました

行かむ 行かず 行かじ

行きぬ 行きつ 行きたし

行くべし 行くらむ

の如きものや

深み 悲しさ 寒け

男らしい 勝手がましい 黄ばむ

古めかしい おもしろがる

上品ぶる 氣違ひみる 花やか

の如きものなどであるが、之等は何れも種々の文法素を接合することによつて語の文法的能力を變質せしめ別様の語として再造する意味のものである。併し之には種々の段階があつて、例へば

(頸)る (腹)む (股)ぐ あはれむ。

大人しい 黄色い 圓い

及ぼす 嵩まる 滅ぼす 加はる

の如きものから

しやうぞく(装束) れうる(料理)

こじく(乞食) さいしく(彩色)

のやうに文法素がその語の内部から自生する如きものすらあるのである。後者は例へば

み位 お心 御殿

眞白 素肌 無禮

お近い こ綺麗

の如きものや

神さま お前さん 林くん

我ら 私ども 君たち

五年め 何番 一等 十號

の如きものであるが、何れもその語の意義部を扮飾する性質のものである。以上は所記的方面から眺めたのであるが、能記的方面から見て之を區別すれば、語尾を形造るに過ぎない性質のものと語幹の一部をも形造る性質のものとのに分れる。前者は嚮の例で言へば

行かれる 行かせる

行かない 行きます

の如きもので、普通に助動詞などと稱せられてゐるものが之に該當する。山田博士が之を複語尾であると言はれたのもかやうな關係からであらうと思はれる。後者は

深み 悲しさ 寒け 男らしい

花やか うれしさう

の如きものと

み位 眞白 お近い お宮

或は

神さま 我ら 君がた 一等

などの如きもので、普通に接辭と稱せられてゐるものである。併して此の接辭には接頭辭と接尾辭との二種があることは言ふまでもないが、この兩者を比較すると接頭辭の方は意義的觀念的であり接尾辭の方は形態的文法的である。随つて又接尾辭の意義的なものと意義的な接頭辭とを比較しても、前者はより文法的であり後者はより觀念的である。かやうな能記的な見方は實は成語的要素ばかりではなく、成節的な要素に於ても行ふことが出来る。即ち語尾變化とか活用形とか稱せられるものは内生的自動的な方式であり、助詞を添へて行くものは外附的累加的な方式である。

以上で觀念的構造に對立する文法的構造に就いて概觀したのであるが、要するに文法的構造の方式には先づ斷續法とも稱すべきもの、即ち節を形成するものと、接合法とも稱すべきもの、即ち語を形成するものとに大別することが出来る。斷續法には文の成立因である斷止法と、句の成立因である連續法とが區別せられ、又之を外形的に見れば活用法とも稱すべきものと助詞法とも稱すべきものとに區別せられる。次に接合法には新たな文法機能を生ぜしめる裝形法とか語形法などと稱すべきものと、意義的扮飾を爲す裝義法とか語義法などと稱すべきものとが區別せられる。之を又外

形的に見れば助動法とか接辭法などといふものが區別せられるのである。

